

【 復活讃詞 第8調 】

めぐみふかきしゅよ、なんぢはたかきより
 恵深主 爾高

くだり、みっかのほうむりをうけて、
 降 三日葬 受

われらをくるしみよりときたまえり、
 我等 苦 釋 給

わがいのちとふくかつなるしゅよ、こう
 我 生 命 復 活 主 光

えいはなんぢにきす。
 榮 爾 歸

【 正教の主日のトロパリ 第2調 】

こうえいはちちとことせいしんにき
 光 榮 父 子 聖 神 歸

す、

じんじなるハリストスカみよ、われらなんぢのし
 仁慈 神 我 等 爾 至

じょうなるせいぞうにふくはいして、わがしよざ
 淨 聖 像 伏 拜 我 諸 罪

いのゆるしをもとむ、けだしななんぢ
 赦 求 蓋 爾

はそのつくりしものをてきのどれいよりすく
 其 造 者 敵 奴 隷 救

わんため に、あまんじてみ にてじゅうじかにのぼり
 爲 甘 身 十 字 架 升

たま えり。ゆえにわれらかんしゃしてなんぢ
 給 故 我 等 感 謝 爾

によぶ、せかいをすくわんためにきたりし
 呼 世 界 救 爲 來

わがきゅうせ いしゅよ、なんぢはしゅうじんを
 我 救 世 主 爾 衆 人

よろこびにみてたまえり。
 欣 喜 満 給

【 正教の主日のコンダック 第2調 】

いまもいつもよよに、アミン。
 今 何 時 世 世

しょうしんぢよよ、かぎられぬちちのことばは
 生 神 女 限 父 言

なんぢよりみをとりにおのれをかぎり、
 爾 身 取 己 限

けがされたるぞうをしんせいなるびれいにあ合
 汚 像 神 聖 美 麗 合

わせて、いにしえのさまにかえしたま
 古 状 復 給

えり。われらはすくいをうけとめて、
 我 等 救 承 認

お こ ない と こ と ば を も っ て こ れ を あ ら わ
 行 言 以 之 顯
 す 。

司祭) (黙誦： 聖なる神、 聖者の中に息い、 セラフィムより聖三の聲を以て歌頌せられ、
 ヘルヴィムより讚榮せられ、 悉くの天軍より伏拝せられ、 萬物を無より有と
 なし、 人を爾の像と肖とに依りて造り、 爾が諸の賜を以て之を飾り、
 願う者に智慧と明悟とを與え、 罪を行なう者を棄てずして、 其救の爲に痛悔
 を立て、 我等卑しくして不當なる爾の諸僕を、 此の時に於ても、 爾が聖な
 る祭壇の光榮の前に立ちて、 爾に當然の伏拝讚榮を奉るに堪うる者と
 なしし主幸よ、 爾親ら我等罪人の口よりも聖三の歌を受け、 爾の仁慈を
 以て我等に臨み、 我等に凡そ自由と自由ならざる罪を赦し、 我が靈と體と
 を聖にし、 我等に生涯善功を以て爾に務むるを得せしめ給え、 聖なる
 生神女と古世より爾の喜を爲しし諸聖人との祈禱に依りてなり、)

司祭) 蓋我が神よ、 爾は聖なり、 我等光榮を爾父と子と聖神に献ず、 今も何時も世世
 に、

ア ミ ン。

【 聖三祝文 】

せ い な る か み 、 せ い な る ゆ う き 、 せ い な る
 聖 神 聖 勇 毅 聖
 じょう せい の も の よ 、 わ れ ら を あ わ れ め
 常 生 者 我 等 憐

よ。せいなるかみ、せいなるゆうき、せい
 聖 神 聖 勇 毅 聖

なるじょうせいのものよ、われらをあわれ
 常 生 者 我 等 憐

めよ。せいなるかみ、せいなるゆうき、
 聖 神 聖 勇 毅

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。こうえいはちちとことせいしん
 光 榮 父 子 聖 神

にきす、いまもいつもよよに、アミン。
 歸 今 何 時 世 世

せいなるじょうせいのものよ、われらをあわ
 聖 常 生 者 我 等 憐

れめよ。せいなるかみ、せいなるゆう
 聖 神 聖 勇

き、せいなるじょうせいのものよ、われらを
 毅 聖 常 生 者 我 等

あわれめよ。
 憐

司祭) (黙誦：主の名に依りて來たる者は崇め讃めらる、ヘルヴィムに座する者よ、爾は其國
 の光榮の寶座に在りて恒に崇め讃めらる、今も何時も世世に、)

【 提綱 (プロキメン) 大齋第一主日第4調 諸祖の歌 】

司祭) ^{つつし} 慎 ^き みて聴くべし、^{しゅうじん} 衆 ^{へいあん} 人に平安、



なんぢのしんにも。
爾 神

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) ^{しゅ} プロキメン、^わ 主、^{せんぞ} 我が先祖の^{かみ} 神よ、^{なんぢ} 爾 ^{さんよう} は讚揚せられ、^{なんぢ} 爾 ^な の名は^{よよ} 世々に^{さんびさんえい} 讚美讚榮せら



しゅ わ が せ んぞ の か み よ 、 なんぢ はさんよう
主 我 先 祖 神 爾 讚揚



せられ、なんぢのな は よよにさんびさんよ うせ
爾 名 世 世 讚美讚揚



られん。

誦經) ^{けだしなんぢ} 蓋 ^{およ} 爾 ^{われら} は凡そ我等に ^{おこな} 行 ^{こと} いし事 ^{おいぎ} に於て義なり、



しゅ わ が せ んぞ の か み よ 、 なんぢ はさんよう
主 我 先 祖 神 爾 讚揚



せられ、なんぢのな は よよにさんびさんよ うせ
爾 名 世 世 讚美讚揚



られん。

誦經) ^{しゅ} 主、^わ 我が先祖の^{かみ} 神よ、^{なんぢ} 爾 ^{さんよう} は讚揚せられ、



なんぢのな は よよにさんびさんよ うせられん。
爾 名 世 世 讚美讚揚

【 使徒經 (アポストロス) 329 半端 エウレイ書 11 章 24 節~26、32~12 章 2 節 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

誦經) 聖使徒パウエルがエウレイ人に達する書の讀、

司祭) 謹みて聽くべし、

誦經) 兄弟よ、信に由りてモイセイは長ずるに及びて、ファラオンの女の子と稱えられるを辭

みて、暫時の罪惡の樂を享けんよりは、寧神の民と共に苦しまんことを願ひ、ハリ

ストスに縁る誹毀を、エギプトの寶よりも更に大なる富なりと意えり、蓋彼は賞を

仰ぎ望めり。我復何をか言わん、若しゲデオン、ヴァラク、サムソン、イエツファイ、ダヴ

イド、サムイル、及び他の預言者の事を述べんには、我に時足らざらん。彼等は信に由り

て諸國を従え、義を行ひ、許約を受け、獅の口を箝ぎ、火の勢を滅し、劔の刃を

避け、弱きよりして強くせられ、戦に勇み、異邦の軍を潰せり、婦は其死者を復

活せし者として受けたり、亦或者は更に善き復活を得ん爲に、免るるを欲せずして、酷

く戮されたり、他の者は嘲弄と鞭扑と、又縲紲と圜圜との試を受け、石にて撃たれ、

鋸にて解かれ、拷問に遇せられ、刃にて殺され、綿羊と山羊との皮を衣て流離し、

窮乏、患難、辛苦を忍び、世界に置くに堪えざる者は、曠野、山嶺、巖穴、地窟に

徨えり、此等皆信に由りて證せられたれども、許約せられし所を獲ざりき、蓋神は

我等の事に於て更に善き事を預見せり、彼等は我等と偕にせずしては全きを得ざらん

爲なり。故に我等も證者の斯く雲の如く衆きに圍まれて、凡の重負と我等を阻む罪

とを去り、忍耐を以て、我等の前に在る馳場を趨りて、我等の信の首、及び成全者

イイスを仰ぎ望むべし。

(比較用 口語訳) 信仰によって、モーセは、成人したとき、パロの娘の子と言われることを拒み、罪のはかない歡樂にふけるよりは、むしろ神の民と共に虐待されることを選び、キリストのゆえに受けるそしりを、エジプトの宝にまさる富と考えた。それは、彼が報いを望み見ていたからである。このほか、何を言おうか。もしゲデオン、バラク、サムソン、エフタ、ダビデ、サムエル及び預言者たちについて語り出すなら、時間が足りないであろう。彼らは信仰によって、国々を征服し、義を行ひ、約束のものを受け、ししの口をふさぎ、火の勢いを消し、つるぎの刃をのがれ、弱いものは強くされ、戦いの勇者となり、他国の軍を退かせた。女たちは、その死者たちをよみがえらせてもらった。ほかの者は、更にまさったいのちによみがえるために、拷問の苦しみに甘んじ、放免されることを願わなかった。なお

ほかの者たちは、あざけられ、むち打たれ、しばり上げられ、投獄されるほどのめに会った。あるいは、石で打たれ、さいなまれ、のこぎりで引かれ、つぎで切り殺され、羊の皮や、やぎの皮を着て歩きまわり、無一物になり、悩まされ、苦しめられ、（この世は彼らの住む所ではなかった）、荒野と山の中と岩の穴と土の穴とを、さまよい続けた。さて、これらの人々はみな、信仰によってあかしされたが、約束のものは受けなかった。神はわたしたちのために、さらに良いものをあらかじめ備えて下さっているので、わたしたちをほかにしては彼らが全うされることはない。こういうわけで、わたしたちは、このような多くの証人に雲のように囲まれているのであるから、いっさいの重荷と、からみつく罪とをかなぐり捨てて、わたしたちの参加すべき競走を、耐え忍んで走りぬこうではないか。信仰の導き手であり、またその完成者であるイエスを仰ぎ見つつ、走ろうではないか。

司祭) ^{なんぢ} 爾 ^{へいあん} に平安、

誦經) ^{なんぢ} 爾 ^{しん} の神にも、ア ril イヤ、

【 ア ril イヤ 第8調 】

司祭) ^{えいち} 睿智、

A ril I ya, A ril I ya,
A ril I ya.

誦經) ^{しさい} 司祭 ^{うち} の中に ^{およ} モイセイ 及び ^{かれ} アアロン ^な あり、 ^よ 彼の ^{もの} 名を呼ぶ者 ^{うち} の中にサムイルあり、

A ril I ya, A ril I ya,
A ril I ya.

誦經) ^{かれらしゅ} 彼等 ^よ 主に呼びしに、 ^{しゅこれ} 主 ^き 之に聴けり、

A ril I ya, A ril I ya,
A ril I ya.



ア リ ル イ ヤ 。

司祭) (黙誦: ^{ひと あい}人を愛する^{しゅさい}主宰よ、^{わが}我が^{こころ}心に^{かみ}神を知る^{ちえ}智慧の^{いさぎよ}淨き^{ひかり}光を^{かがや}輝かし、^{わが}我が^{しねん}思念
^めの目を^{ひら}啓きて、^{なんぢ}爾が^{ふくいん}福音の^{おしえ}教を^{さと}悟らしめ^{たま}給え、^{わが}我が^{うち}衷に^{なんぢ}爾の^{ふく}福たる^{いましめ}誠を
^{おそ}畏るる^{おそれ}畏をも^い入れて、^{われら}我等が^{ことごと}悉くの^{にくたい}肉體の^{よく}慾を^ふ踏み、^{およ}凡そ^{なんぢ}爾の^{よろこ}喜ぶ^{ところ}所
^{おも}を思い^か且つ^{おこな}行いて、^{ぞくしん}屬神の^{せいかつ}生活を^す過ぐるを^{いた}致させ^{たま}給え、^{けだし}蓋^{かみ}ハリストス神よ、
^{なんぢ}爾は^{わが}我が^{たましい}靈と^{からだ}體との^{こうしょう}光照なり、^{われら}我等^{なんぢ}爾と^{なんぢ}爾の^{むげん}無原の^{ちち}父と^{しせいしぜん}至聖至善にし
^{いのち}て生命を^{ほどこ}施す^{なんぢ}爾の^{しん}神とに^{こうえい}光榮を^{けん}獻ず、^{いま}今も^{いつ}何時も^{よよ}世々に、^{アミン}アミン。)

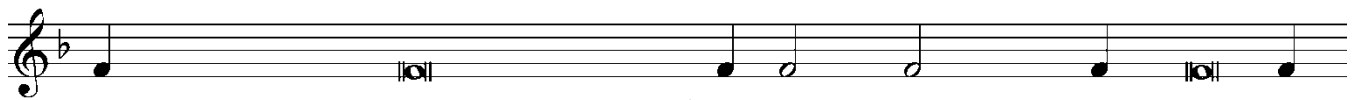
【 福音經 (エヴァンゲリオン) イオアン福音書5 端 1 章43~51 節 】

司祭) ^{えいち}睿智、^{つつし}肅みて^た立て^{せいふくいんけい}聖福音經を^き聴くべし、^{しゅうじん}衆人に^{へいあん}平安、



なんぢの し んにも 。

司祭) ^{でん}イオアン傳の^{せいふくいんけい}聖福音經の^{よみ}讀、



しゅよ、 こう え い は なんぢに き し、 こう え い
主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮



は なんぢに き す 。

司祭) ^{つつし}謹みて^き聴くべし。^か彼の^{とき}時^ゆイイスス、^{ほつ}ガリレヤに^あ往かんと^{これ}欲し、^いフィリップに^い遇いて、^{これ}之に^い謂

^{われ}ふ、^{したが}我に^{ひと}從え。 ^{およ}フィリップは^{まち}ヴィフサイダの^{おな}人にして、^あアンドレイ及^{およ}び^{おな}ペトルと^{おな}邑を^{おな}同じ

^あくせり。^{これ}フィリップは^いナファナイルに^{われら}遇いて、^{そのりつぼう}之に^{およ}謂う、^{およ}我等は、^{およ}モイセイが^{およ}其^{およ}律^{およ}法に、^{およ}及^{およ}び

^{しよげんしゃ}諸^{しる}預^{ところ}言^{もの}者^あが^こ記^こし^{ひと}し^{ひと}所^{ひと}の^{ひと}者^{ひと}に^{ひと}遇^{ひと}え^{ひと}り、^{ひと}是^{ひと}れ^{ひと}イ^{ひと}オ^{ひと}シ^{ひと}フ^{ひと}の^{ひと}子^{ひと}、^{ひと}ナ^{ひと}ザ^{ひと}レ^{ひと}ト^{ひと}の^{ひと}人^{ひと}、^{ひと}イ^{ひと}イ^{ひと}ス^{ひと}ス^{ひと}な^{ひと}り。^{ひと}ナ

^{これ}ファ^いナ^{あに}イル^よ之^{もの}に^い謂^いえ^いり、^い豈^いナ^いザ^いレ^いト^いよ^いり^いよ^いき^い者^いの^い出^いづ^いる^いあ^いら^いん^いや。^いフィ^いリ^いッ^いプ^い曰^いく、^い來^いり^いて^い觀

^{おのれ}よ。^{きた}イ^みイ^みス^みス^みは^みナ^みフ^みア^みナ^みイル^みの^み己^みに^み來^みた^みる^みを^み觀^みて、^み彼^みを^み指^みし^みて^み曰^みく、^み視^みよ、^み誠^みに^みイ^みズ^みライ

じん いてわり もの にかれ い なんぢなに よ われ し
 リ人にして、詭譎なき者なり。ナファナイル彼に謂う、爾 何に由りて我を知れるか。イイ
 こた い いま なんぢ よ さき なんぢ いちじく した あ とき われ
 ス 答えて曰えり、フィリップが未だ 爾 を呼ばざる先、 爾 が無花果樹の下に在る時、我
 なんぢ み こた にかれ い ラヴィ なんぢ かみ こ なんぢ おう
 爾 を見たり。ナファナイル答えて彼に謂う、夫子、 爾 は神の子、 爾 はイズライリの王な
 こた い われ なんぢ いちじく した み い よ なんぢしん
 り。イイス 答えて曰えり、我が 爾 を無花果樹の下に見たりと言いしに因りて、 爾 信ず、
 なんぢこれ おおい こと み またかれ い われまこと まこと なんぢら つ これ なんぢ
 爾 此よりも 大なる事を見ん。又彼に謂う、我 誠に誠に 爾 等に語ぐ、是より 爾
 ら てんひら かみ つかいら ひと こ うえ のぼりくだり み
 等は天 開けて、神の 使 等が人の子の上に 陟 降 するを見ん。

(比較用 口語訳) イエスはガリラヤに行こうとされたが、ピリポに出会って言われた、「わたしに従
 ってきてなさい」。ピリポは、アンデレとペテロとの町ベツサイダの人であった。このピリポがナタナ
 エルに出会って言った、「わたしたちは、モーセが律法の中にしるしており、預言者たちがしるしてい
 た人、ヨセフの子、ナザレのイエスにいま出会った」。ナタナエルは彼に言った、「ナザレから、なん
 のよいものが出ようか」。ピリポは彼に言った、「きて見なさい」。イエスはナタナエルが自分の方
 に来るのを見て、彼について言われた、「見よ、あの人こそ、ほんとうのイスラエル人である。その心
 には偽りが無い」。ナタナエルは言った、「どうしてわたしをご存じなのですか」。イエスは答えて言
 われた、「ピリポがあなたを呼ぶ前に、わたしはあなたが、いちじくの木の下にいるのを見た」。ナ
 タナエルは答えた、「先生、あなたは神の子です。あなたはイスラエルの王です」。イエスは答えて言
 われた、「あなたが、いちじくの木の下にいるのを見た、わたしが言ったので信じるのか。これより
 も、もっと大きなことを、あなたは見るであろう」。また言われた、「よくよくあなたがたに言
 っておく。天が開けて、神の御使たちが人の子の上に上り下りするのを、あなたがたは見るであ
 ろう」。

しゅよ、こうえいはなんぢにきし、こうえい
 主 光 榮 爾 歸 し、 光 榮
 はなんぢにきす。
 爾 歸

※聖体礼儀③ へ